風の音（ネ）

大沢　綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の音（ネ）

【Ｎコード】

Ｎ９９２１Ｉ

【作者名】

大沢　綾子

【あらすじ】

「むかえ橋ー春雷シリーズ」の続編。

恋人の帰りを待っている千秋のひとときを描いています。

夏の名残の風鈴が鳴っている。
りーん、という柔らかい音に耳を傾けながら、萩原千秋は恋人の帰りを待っている。窓の外は夜――しのつく雨は、やむ気配もなかった。
長い髪を所在なさげに編んだりほどいたりしている姿は、膝をななめに崩しているせいもあって幼い少女のようだ。透きとおるような肌に、赤いくちびる――最も人目を引くのは長い睫毛に縁取られた漆黒の瞳。そのせいで、性別を超えた美貌を千秋は持つことになった。
身体も、華奢だ。
幼い頃から病弱で、とても長生き出来ないと生まれた時から言われていた。言った医者はとっくにこの世に存在しないが――今の千秋を知ったら腰を抜かして驚くだろう。
すでに千秋は、生きられないと言われた年齢を越えた。見かけは２０代前半に見える。
ふとそう思って、千秋は小さく笑っていた。
その笑いにまた、風鈴の音（ね）が重なった。
その風鈴は、今年の夏に訪れた川崎大師の風鈴市で恋人とふたり、懐かしさに買い求めたものだ。緑青色の南部鉄は、柔らかな音色で風を鳴らした。そのうち、小さな鉄瓶でも買ってみようと話しながらの帰り道は楽しかった。
南部鉄の鉄瓶で沸かした湯は、ほどよく甘くまろやかになる。それで茶を淹れればおいしいと、昔の記憶を舌が覚えていた。
（いま、どの辺りだろう……）
恋人の倉田光太郎は、まだ戻らない。時刻はすでに、夜半を過ぎて夜明けを待つ方が近くなっていた。こんな時刻まで起きていた、と知れば光太郎が怒るのはわかっている。千秋はそれでも、待って

いたかった。光太郎がいる場所が場所だけに、少し不安なのだ。
そういう気持ちは、ひさしぶりの事だった。
千秋は一度、恋人を失った。
帰ってくる、と約束をしたにも関わらず――光太郎は、世界から消えたのだ。あの苦しみは、もはや苦悩とさえ言えない。千秋にとっては、光太郎はじぶんが生まれた時からの運命だった。その「運命」がじぶんの世界から消えてしまえば、どうなるか。狂った歯車のままで流転しつづけるしかない。
そして千秋は、長い年月を慟哭とともに流転した。
その日々を思い出せば――千秋の瞳からは自然に涙がこぼれる。そしてこの瞬間、その涙を拭ってくれる恋人は不在だった。
白いローテーブルの上に腕を組んで、千秋は小さな頭を乗せていた。漆黒の髪が広がって、背中に流れる。その髪も、光太郎が誉めてくれたから――たまに揃えるだけにしていた。
また――風鈴が鳴る。
それはまるで、もう夏は終わりだよ、と囁いているかのようだ。そして、光太郎の不在という巨大な空疎感に千秋は遠い昔の夏を思い出していた。

その頃、千秋は深い諦めの中でただ生きていた。その頃というのは――昭和３８年、東京オリンピック開催の前年の夏。敗戦の焦土の中から「日本」がやっと国際社会の一員となるのだと、東京は、どこもかしこも土木と建築工事に沸き返り、空前の好景気を味わっていた。
日本中が、世界の祭典に向けて興奮と熱気に包まれていた中で、千秋は青く澄んだ空を見上げていた。
――いつ、終わるのだろう。
毎日、そればかりを考えていた。どうすれば「終わり」を迎えられるのかが、千秋にはわからない。どの方法を試してみても、千秋

には人で言う「終焉」がなかった。厳密に言えばすでに千秋は「ひと」ではない。
何度死んでも生き返るなど、もはや生物としての範疇も越えている。そういう自分が恐ろしくて、千秋は何度も住む場所を変えてきた。名前も変えた。歳もとらないままでは、同じ土地に長く居続ける事は出来ない。それに――千秋の不運はいつでも、誰かの妄執に囚われてしまう事だった。
千秋の美貌が原因なのか、それとも他人をそういう気にさせる昏い匂いがあるのか。とにかく、常に千秋はそのせいで何度も死の苦痛と断末魔を味わった。
それでも――死ねない。
土に埋められても、海の底に沈んでも――千秋は必ず再生した。
そのこと自体が、千秋に課せられた因果だった。そして、昭和38年という時期にはすでに、千秋は死ねない事にも諦めていた。
（せめて……静かに生きたい）
誰とも深く関わらず、ただひっそりと生きていければいい。そうやって生きていくうちには、何故じぶんがそういうモノなのかがわかる時も来るかもしれない。そう思っていた。そして、心の中にある大切な面影を消さないように、毎日のようにたった一人の顔を想いつづけた。
思えば――すべての始まりは、その年上の従兄だったかもしれない。
本家の長男だった倉田光太郎は、一回り年上。病弱だった千秋に比べて、風邪ひとつひいたことのない太陽のように暖かくてやさしい従兄だった。その従兄を、いつしか恋情の籠った瞳で見ていたのが、千秋の罪だったのだろうか。
その想いは、今も消えない。
どんなに留めておこうとしても、手のひらからこぼれ落ちる砂のように記憶は風化していく。千秋の手元には、色褪せた写真一枚すらなかった。暖かかった笑顔は少しずつ綻んで、輪郭を崩していく。

光太郎の顔は、すでに細部は忘れられてイメージとなっていた。それでも千秋はわずかに残る記憶のかけらにしがみつく。手離してしまえば――自分が何になってしまうのかが、恐ろしい。

今はまだ――少しは人間らしい心でいられるが、それを忘れてしまったら、とそんな自分が怖かった。

だから、千秋は毎日その従兄の名前を呼んだ。

（……光太郎さん）

昔は、兄さん、と呼んでいた。そう呼んで、あとをついて回った。見かけも中身も男らしい、さっぱりした気性におおらかなやさしさを持つ従兄は、幼い千秋のあこがれだった。それがいつしか、思慕になり――つきつめるような恋情に変わっても、それでも光太郎は千秋を受け止めた。

ただ、一度だけ。

千秋が光太郎の腕に抱かれたのは、たった一夜の事だった。

その夜の記憶だけは、いまでも忘れていない。何年、何十年経っても――千秋の中に幸せなものとして刻印されていた。

当時の死病だった結核に侵されていた千秋の、嫌がって逃れる顎をとらえてくちびるを合わせてくれた。細い身体を覆うように抱きしめて、千秋の中でその命のきらめきを放って言ってくれた。

――生きろ。必ず帰ってくるから、生きていろよ。

そして千秋は、それから何十年も経ってもはや明治という時代も遠くかすんでしまった今になっても、生きている。

死ねない。

すでに光太郎などはどこにもいないのに――まだ、生きている。

（僕は……なに？）

その答えは、わからない。何度死んでも、生き返る。それを繰り返すうちには、考えることさえやめてしまった。

そして千秋は、オリンピックへの熱気に包まれた東京の下町で、老夫婦の営む和菓子屋の店先に立っていた。いずれはここからも、消えるしかない。どこに住んでも、仮の場所。あちこちを転々とし

ながら生きる事にも、慣れていた。

風鈴が、急に激しい風の音を鳴らす。

はっと千秋は顔を上げて――窓を透かし見た。その瞳に映るのはまばゆいばかりの稲妻。

（帰ってきた……！）

あの時も、そうだったのだ。

４５年前の残暑の中、それまでは晴れていた空がにわかに黒雲に覆われたかと思うと、激しい雷鳴が鳴り響いて豪雨になった。千秋は慌てて軒先に出していた和菓子のケースを片づけに表に出て――そこに、一人の男を見つけていた。

当時の千秋は、名前を変えていた。田中一郎――何の変哲もない名前。

店先に立つ男は、千秋の動きを止めてしまったほど従兄に似ていた。だが、そんな事などあるはずがない、と強く打ち消す。倉田光太郎はもう、死んだ。朝鮮半島の奥――旅順の土になって消えたのだ。日露戦争で消えた何万柱のうちの一柱になった。

なのに――その男は懐かしそうに千秋をしばらく眺めたあとで、呼んだ。本当の千秋の名前を。

――やっと、還ってきた。千秋、おまえのところへ。

光太郎が別の世界から戻って来るときにはいつも、嵐になる。今夜の光太郎は、老女の魂を送るためにあの世への階（きざはし）を一緒に歩いてやっていた。それが終って、戻って来たのに違いなかった。

千秋が立ち上がるのと、アパートのドアが開けられるのは同時だった。

そして千秋は、ものも言わずに光太郎の広い胸にむかって身体をぶつけていく。あの時と同じに、なんのためらいもなく飛び込んだ。あの時と違うのは――千秋の頬には涙ではなく、微笑がある。

光太郎の腕が回されて、見上げればそこに見慣れた暖かい笑顔が

あった。
「……どうした」
「ちょっと、心細かったから」
千秋が言うと、光太郎の手が髪を撫でて頬を包んで「馬鹿だな」と答えていた。そうして、くちづけてきた。身をすり寄せるようにすると、いっそう強く抱きしめてくる。軽々と抱き上げて居間まで来ると、やっと降ろしていた。
「どこへも、行かないさ……おまえが、俺の場所だ」
「……うん」
千秋は、幸せそうに微笑んだ。
光太郎が自分の世界に戻ってきてからの千秋は、幸せの中に生きている。相変わらず年もとらずにいるが――死の苦痛を味わうような目には遭っていない。それに、もう自分が何かと思い悩む必要もなかった。
倉田光太郎も、人ではない。
生まれた時からそうだった。
東北の奥深い山の中にひっそりと忘れ去られて眠る、竜神の化身が彼だった。だから、病も死も光太郎には縁がない。
そして――千秋はその竜神の一対だ。
永遠の一対。
「ねえ……旦那さんは、待っていてくれた？」
千秋は抱かれたままで、老女の事を訊いた。光太郎の胸に頬を預けている顔は、穏やかでやさしい。
「……ああ、迷わずに済む」
よかった、と千秋は呟いて、その呟きをまたくちづけの中に埋めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9921i/

風の音（ネ）

2010年10月8日15時25分発行